

◇ 15. 紹介記事、インタビュー記事、テレビ出演など ◇

1. 安部治彦

医療ルネサンス「失神を知ろう ― 問診と心電図 危険性診断 ―」  
 読売新聞 平成30年(2018年)4月5日朝刊, 全国版

平成30年4月5日(木) 読売新聞 朝刊 17面(くらし面)

医療ルネサンス No.6771 失神を知ろう ①/5

問診と心電図 危険性診断

妻と話しながらスパーを歩いている途中。居間でぼろぼろしている時。福岡県に住む会社員の男性Aさん(66)が気を失うのは、日常の何げない場面。急に体が崩れ落ち、10秒ほどで元に戻る。まるで何事もなかったかのように。

2009年末から、ほぼ毎月、気を失うようになつたAさん。総合病院の救急外来から始まり、内科や精神科を転々とした。軽いめまいやストレスと言われ抗うつ薬を飲んでみたが、一向に良くならなかった。

精神科医の紹介で翌年8月、産業医大病院(北九州市)神経内科を受診した。「脳波に問題はない。てんかんではなく、失神でしょう」。同じ病院の循環器内科に紹介された。

失神は、急に意識を失う一過性の発作。脳血流の悪化で起こる。数秒から数分



安部さん(右)から心臓の検査結果について説明を受けるAさん(北九州市の産業医大病院で)

- ◆心原性失神の疑いが強いケース
- ・重い心臓病を持っている
  - ・動いている時や横になっている時だったり、動悸を伴ったりする
  - ・家族に突然死した人がいる
  - ・心電図検査で何らかの異常を指摘されたことがある

以内に自然に回復する。

原因はいくつかある。不整脈など心臓の動きが悪くなつて起こる心原性失神は、命に関わる危険なタイプで、すぐに治療が必要だ。

心原性失神は、体を動かしている時や、横になって起る時に起こりやすい。A

さん、まさかそうだった。心電図検査でも、不整脈の疑いが強まった。原因を突き止めるには、実際に失神した時の心電図をみる必要がある。月1回程度のタイミングを確実にとらえるため、体内に植え込む長時間心電計を使うこ

とにした。最長3年間、連続で記録できる。

日帰りで植え込み手術を受けた帰り道、駐車中の車内で、首がかくんと倒れた。意識を失ったかどうかわからないほど一瞬だった。

だが、心電図は8秒間の心停止を記録。この間、心臓を動かす電気信号が伝わらなくなっていた。不整脈の一種で、放置すると命を落とす危険がある。

すぐに心電計を取り出し、ペースメーカーを植え込み手術を受けた。以後、失神は一度もない。

「原因がわからなくて悩み、夫婦でお遍路にも出たんですよ。まさか心臓が原因とは、思ってもみなかった」。Aさんは振り返る。

産業医大教授(不整脈先端治療学)の安部治彦さんは、「危険な失神かどうかは、問診と心電図で、ある程度わかります。適切な診断のためには、まず循環器内科を受診してほしい」と呼びかけている。

(このシリーズは全5回)

2. 安部治彦

産業医が診る働き方改革「心臓疾患からの復職」

西日本新聞 医療面「医療いのち」平成30年（2018年）10月8日朝刊

平成30年10月8日（月） 西日本新聞 朝刊 9面（医療面）

鈴木正治さん(54)「仮名」は工業機器会社の技術専門職です。仕事中に失神し、原因を精査するために入院しました。検査の結果、心臓の筋肉が非常に厚くなる「肥大型心筋症」に、危険な「致死性不整脈」を合併したことが失神の原因と判明しました。健康診断で異常を指摘されたことはなく、自分では健康と思っていたため、大きなショックを受けていたようです。

致死性不整脈については、自動的に電気刺激を起こし、心拍を整える「体内植え込み型除細動器（ICD）」での治療が施されました。他の治療法に比べ、予後を改善させる効果が科学的に証明されていますが、いくつかの問題点もあります。治療後や作動後は一定期間、車の運転が制限されます。また、電磁波が発生する職場（溶接作業現場など）では誤作動して意識を失う

産業医が診る働き方改革

②

心臓疾患からの復職



イラスト・茅島陽子

恐れがあります。注意しないと、事故につながりかねません。

従業員が50人未満の鈴木さんの会社には産業医がいませんでした。このため、主治医であり心臓専門医の私が上司と連絡を取り合い、復職に向けて具体的な注意点を伝えました。職場で鈴木さんが移動する可能性がある場所全ての電磁環境調査も行い、安全を確認してもらいました。

た。鈴木さんには「ストレスで致死性不整脈が起こる可能性もあるので、無理をしないように」などと伝えました。



国内では、心臓の異常が原因の突然死が年間約7万人も発生しており、約3割は69歳以下です。ある日突然、心肺停止状態となり体外式除細動器（AED）で一命を取り留めた人、心臓の働きが低下して

おり、突然死の予備軍ともいえる人。年間約9千人がICD治療を受け、うち60歳以下の就労世代が約半数を占めます。鈴木さんのように、ICD治療後に職場復帰する患者さんは少なくありません。

鈴木さんは当初、バス通勤で苦労したようですが「電磁波の影響を心配せず、働けるのが一番良かった」と話しています。主治医が患者の職務内容のある程度把握し、退院後の注意点を患者だけでなく、職場にも伝えておくことは非常に重要なことです。

（安部治彦「産業医大教授」）